



## 銀行よ原点へ戻れ そして貸付業務に汗をかけ 《その3》

一ペリー航以來米國アングロサクソン、エスタブリッシュメント  
(以下AEとする) にふりまわされる日本—



話を急に戻しますが1853年のペリー提督の日本來航は皆さん御存知のはずですが其の上に米國東印度艦隊司令長官というのは余り知られてな  
いと思う。これひとつみてもこの頃からAEの極東における対日研究がさ  
れていたのである。太平洋戦争の敗戦、米國流食生活の導入、貿易大國  
として力を付けたと思いきや360円から100円近くまで切り上げられ、金  
融緩和で余り返った金で米國のビルや企業を高値で買わせられ、今度は  
バブル崩壊後の安くなった銀行、証券を買取しそれを又高値で売却して  
きたこと。そして今回の東京の第二次不動産バブルを仕掛け高値がきた  
と思いきやいつきに金を引き上げ、不動産と建設業の死屍累々の惨状を  
もたらしている。この60年近い歴史が物語っています。それに引き換え  
蒙古襲来の神風以來戦前、戦後を問わず神の國日本じゃないけれど自己陶  
酔型日本人は余りにも対外研究とか対外情報を軽視したついでを、  
払わされようとしている事に気づくべきなんです。本當の金融危機は  
大量に発行される米ドル債(一体日本全体でいくらく保有しているのか財  
務省、日経新聞は発表すらない)とこの不景氣3~4年後には1000兆  
円なんんとすると日本國債の信用危機(テレビインタビューでも市民の  
声を聞いていると赤字國債の発行を次世代のつげになるから反対だなん  
て言っているがなにを暢氣なことを言っているのかと思う。今、生きてい  
る我々の世代につげが回ってくることに気がつかないと。)なのだが、我々  
庶民はじゃ何をすべきかと言うことですがとにかく投資という聞こえの  
いい言葉で上場会社でもプロローカーの話でも美味しい投資話はしつかり  
自分で検討し身を守るか術しかないだろう。その意味でも今の低金利政  
策を見直し、適正金利に徐々に戻していくべきであり、「貯蓄から投資」  
という金融政策を見直しいいチャンスのチャンスなのです。この超高齢化社会への  
変貌の中でGNP寄与度より高齢者の消費乗数が高くなってきているのです。

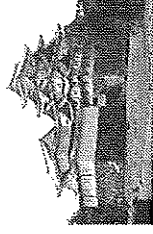
(試算 1500兆の個人資産の半分が高齢者が方保有しているのとされてい  
る。1500×1/2×2%=15 なんとGNPの3%に相当する金融所得で  
ある。これが消費に回ればその乗数効果は?源泉税20%として3兆円、  
なんと消費税1.5%に相当) 私が担当している中小企業の社長が「この大  
不況期に金利をあげるとは何事や」とお叱りを受けそうだが、もう一度  
投資に流れた金を貯蓄に引戻す為にも定期預金金利は2%程度に上げる  
べきなのです。それに1%の利鞘をのっけても3%の貸し出し金利にな  
るが個人の住宅ローンでもそれぐらい払っているのだから企業経営者も  
頑張るべきである。その代わり手形貸し付けや代表者個人保証の免除も  
検討すべきである。運転資金だから返済期間は5年内などと言わず住宅ロ  
ン並みに10年以上も検討すべき。そして銀行担当者も異動が多すぎる。  
転働のない貸し出し専門職も作れるはず。長い眼で中小企業を見られる  
こと可能になる。銀行もなにが詰まっているかもわからない投資信託や  
変額年金の販売に血道を上げるのではなく、日本には世界に冠たる製造  
業が残されており、それを支える中小企業を育てる貸し出し業務の原点  
に立ち返るべきである。我々ベンチャー支援関係者も果たして20や30歳  
代の事業経験のない世代に億単位の返済義務のない金を任せせるのが正し  
いのかどうか。貸し出したと慎重になるのが投資となると任せっぱなし  
というもおかしい話である。今回の不動産ファンドブームの中で物件  
も観ずにパソコン上だけで不動産を買おうとびびりくりくりしたものです。  
手を抜くにも程があります。貸し出しを通じ企業を育て雇用を広げる考え  
に立ち返る時期が来ているのではないのでしょうか。確かに投資商品を売  
るより儲けも少なく手間も地道な企業情報収集という努力も要する仕事  
ですがそれが銀行の仕事なのです。

大阪ベンチャー倶楽部(NPO、次世代経営者育成塾) 代表幹事 山口 政  
不動産兼経営コンサルタント

## 名古屋の正月風景と名古屋氣質

関西を飛び出して早いもので間もなく3年が過ぎようとしています。  
日が経つにつれて思うのは、関西では季節折々の風物が大変味わい深い  
ものであったな、ということ。こと年末年始の町の風景は「いよいよ  
よ新しい年を迎えるんだな」という高揚感で満ち溢れ、忘れがたいもの  
となっていました。

さて、今回は私の故郷である名古屋の正月風  
景について綴ろうと思います。名古屋といえは、  
冠婚葬祭に見られるような派手な振る舞いから、  
さぞかし大仰な正月の迎え方をするのだからと  
想像される方も居られるかも知れませんが、実  
際には大変地味に年末年始を過ごします(町中では米屋やお餅を頼むことが多  
いですがね)。台所では御節につめる黒豆や田作りの甘い匂いが漂いはじ  
められます。この匂いは大晦日のお昼過ぎくらいまで続き、綺麗に重箱につ  
められます。茶の間に家族が集いテレビで「紅白歌合戦」が始まる頃  
になると、出来上がった御節料理が卓袱台の中央に置かれ、気がつくくと年



迎えの膳が進んでいるのです。除夜の鐘が鳴る頃には年越しの蕎麦(普  
段は蕎麦を食べること少ないです)が運ばれ、それを食べ終えるとき、み  
んなで近所の神社へ向かい、ゆく年への感謝と向かえる新年への期待を  
胸に年を越します。

元旦は、遅くまで寝ていて、昨夜の残りの御節料理(中味は補充済み)  
と御雑煮、御屠蘇を頂きます。御雑煮は意外とシンプルで、薄口醤油ペー  
スの鯉出汁(味噌仕立てではないのです)に、餅は焼かずに、水菜や鶏  
肉(かしわ)などの具と一緒に鍋に入れて煮ます。食事がひと区切りつ  
くと、スルメや勝栗などを食べて歯固めを行います。子供たちにお年玉  
をあげて、元旦の行事を終えます。その後は、子供たちと一緒に、寒空  
の下で凧揚げや羽根突きをしたり、家でトランプやカルタをしたり、と  
昔変わらぬ遊びをして過ごすのです。名古屋の町は変わりますが、大き  
な変化を嫌う氣質があるのだと思います。いつまでも「大いなる田舎」  
と呼ばれる所以でしょうか…。

阿部 剛久

## ◆ 台湾の結婚式に行ってきた!! (その1)



(結婚式風景)

平成20年の7月20日(日)から3泊4日で  
台湾に行ってきました。今回の旅行の目玉は、  
台湾人と結婚することになった私の友達(結婚  
パーティーに出席すること。新婦の彼女は、  
私の中学時代からの親友で、非常に個性的な  
女性。今回の結婚も、そもそも、26歳の時に、  
彼女が急に思い立ってアメリカへ語学留学に  
旅立ち、1年半をロサンゼルスで過ごし、そ  
こで台湾人の彼と知り合ったことがきっかけです。国際結婚というだけ  
でも、私の感覚では大変な驚きなのに、今年の2月から、彼女はさら  
と台湾へ移り、彼の両親とお姉さんとその子供たちと同居生活を始めた  
のでした。今回のパーティーも、1ヶ月前くらいに、中国語で印刷され  
て届いた赤い招待状によると、レストランを貸し切って行うスタイルで、  
夕方からの開始とのこと。友達からは、「日本の披露宴のように大げさ  
にはせず、普通のレストランでご飯食べるだけやから…」と言われてい  
たのですが、全てが未知の世界。服装は?お祝儀は?など、一緒に出席  
する友人と話し合っ、台湾到着後、一応失礼にならないように、日本  
の披露宴と同じようにドレスアップして、お化粧も濃い目にし、お祝儀  
も日本円で日本の相場場で用意したスタンプバイ。会場になっていたレストラ  
ンのフロアの入り口に到着すると、ボスター大に引き伸ばされた、新郎  
新婦の記念写真のパネルがお出迎えしてくれ、会場も一面に赤やピンク  
や白のハート型の風船が浮かんでおり、きらびやかなシャンデリアが輝  
いていました。会場の奥の方では、スクリーンに新郎新婦の変身写真が  
スライドで映されていました。台湾ならではの、チャイナドレスや、ウェ  
ディングドレスやカクテルドレスなどを着用して何パターンも撮っていたも  
ので、出席者には、縮小版のカードサイズの二人の写真が記念に配られ  
ました。

石田 千代

## ☆VECホームページがリニューアルしました!

今年1月からホットな支援情報やイベント情報等を毎月ご案内いたし  
ます。関西支部の機関紙「てんこもり」や「交流会予定」も載っており  
ますので、是非ご覧下さい。(http://www.vec.or.jp)

## ～VEC関西より～

- ◆ 成長を続ける「フジキン」、その成長の秘密を見る思いです。IPO  
最短距離にある「フジキン」の小川洋史社長。VEC誕生以来の大  
ボスです。山口政さん三回にわたってのサビの聞いたご意見。慎  
に同感。銀行は本来の姿に早く戻って、この難関を突破するパワ  
ーを貰いたいものです。(本田)
- ◆ VECのホームページに関西支部関連の記事を載せるといいうので、  
掲載や更新の方法とか、慣れるまでは大変かも知れませんが頑張  
ります。まだまだ新しい事に挑戦していきたいと思えます! (藤本)
- ◆ 今年も恒例となりましたフジキンカンパグループ「だるま経営」のパー  
トVを小川社長よりご寄稿いただきました。プラス指向とユニークな  
発想一只々々いいます。(澤村)

## ◆ (交流会予定)

3月23日(月) 鳥取環境大学 環境情報学部  
教授 鷺野 翔一 様

